篠原幸雄からやましたゆきおへ
マンガと生きた50年
11
「ふしぎな仲間たち」その後

ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日（金）から29日（日）の会期で開催しました、新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ　マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

11、「ふしぎな仲間たち」その後

ふしぎな仲間たちと木下印刷

印刷会社との出会い

葛飾区高砂にある小さな印刷屋、木下印刷が無ければ「ふしぎな仲間たち」を作ることはできなかった。

木下印刷を紹介してくれたのは、高校の文芸同人誌で一緒だったKoくんの弟で、「友人の中に同世代で実家の印刷屋を継いだ若い頑張っている社長がいるから一度会って欲しい」と言われたのがきっかけだった。

父親がやってきた活版印刷の工場だったが、体調を崩し、急に長男の現社長が継いだということだった。工場に新しいオフセット印刷の機械を入れ、経営を立て直そうとハリキッテいた。

私が最初に頼んだのは、マンガの原稿用紙の印刷だった。今では誰でも買うことができる、薄い青インクでマンガのコマ枠の基本形が印刷されている「マンガの原稿用紙」だが、その当時はその様な物はどこにも無く、手塚治虫の「マンガの描き方」に書いてあった、千枚通しで数枚の用紙を

束にして穴を空けて、それを定規でつないで、マンガの原稿用紙を作っていた。

たぶん、ジャンプでデビューした後、秋田書店で描き始めたころだったと思うが、薄い青インクでマンガの枠線を印刷すれば原稿用紙として使えることを知り、木下印刷にお願いしたのでした。

ふしぎな仲間たちの印刷製本を頼む

今は少部数の同人誌を激安の金額で印刷製本してくれる、同人誌専門の印刷所がたくさんあるが、当時はそのような所はなかった。

普通のオフセット印刷で作ると、一般のマンガ雑誌程度の定価で売るためには、1万部以上の部数を印刷しないと実現できなかった。

木下印刷の社長に相談すると、こちらの志を理解してくれて、すべて材料費と印刷代、製本代を利益無しの原価で引き受け手くれることになった。そのおかげで、発行部数２０００部で全部売り切れば製造原価が回収できる金額が実現できたのです。

ふしぎな仲間たちは、多くの方がボランティアで支えてくれたことで、定期発行のマンガ雑誌というところまでを実現できた雑誌だったのです。

それでも赤字になって、木下印刷には、１００万円以上の負債を作って休刊することになってしまいました。

借金を仕事で返す

木下印刷から、借金の返済のために、「マンガの入ったチラシや印刷物のデザイン、そして版下の仕事などを発注するので、優先的に引き受けて欲しい、そのギャラで毎月借金の返済をして欲しい」との提案があり、私はいままでやってきたことを全て捨てて、借金返済のために木下印刷からの提案を感謝して受け入れ、仕事をする決心をしました。

私の実家のある練馬と木下印刷のある高砂の中間地点の、山手線の西日暮里と京成線の町屋の間に部屋をかり、毎日、町屋から京成線で高砂へ行って仕事をもらう日々が続きました。

木下印刷社長の全面的な支えで、私は約1年間で借金を返済することが出来たのです。

私は、ふしぎな仲間たちの経験と、木下印刷での経験が、今までマンガを描いて表現するという形で、自分自身を表現するマンガ家として生きて行きたいと、一筋に考えてきた自分とマンガとの関係を、大きく変える基礎を作る期間だったと、今思い返すと感じています。